

# 「日銀グランプリ」への挑戦を通じて得たもの

武内 瑛 紀

(経済学科三年)



## 感激の受賞

二〇一〇年十二月四日、私たち三人（佐々木拓見、小糸恵里子、武内瑛紀）は日本銀行副総裁を前にして、「日銀グランプリ決勝」の審査結果の発表を待っていた。敢闘賞か、優秀賞か、それとも最優秀賞か……。

「やるからには日本一を目指す」。そう決めてから六カ月間必死にやってきた。様々な思いが巡る中、私たちは結果発表のときを待った。

西村副総裁は一度顔を上げ、再度原稿に目を落としながら、おもむろに口を開いた。「最優秀賞は、麗澤

大学チームです」。その言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが弾け、涙がこぼれ出た。「今までやってきたことは間違っていないなかった。自分たちは日本一になったのだ」という喜びが一気に湧き上がってきた。そして、ここまでの努力を思い出すと、嬉しさとともに、熱いものが込み上げてきたのだ。

指導して頂いた中島真志先生を始め、ゼミの先輩や友人からたくさんのお言葉をもらい、それらひとつひとつが結晶となり、今回、最優秀賞を受賞することができた。以下に、日銀グランプリへの挑戦のスタートから、決勝に至るまでの道のりを振り返る。





前列左から、武内瑛紀さん、佐々木拓見さん、小糸恵里子さん

きっかけ

今回の日銀グランプリへの挑戦は、ゼミナールで「日銀グランプリという学生向けのコンクールがあるので、参加してみないか」という、中島先生の声かけから始まった。三年次からのゼミで金融分野を本格的

に勉強し始めてからまだ日は浅かったが、佐々木、小糸、武内の三人で、とにかく挑戦してみようということになった。

今回の日銀グランプリのテーマは「わが国の金融への提言」であり、切り口は、わが国の金融機能への提言と日本銀行に対する提言、の二つであった。私たちは、新しい切り口である「日本銀行への提言」に的を絞った。これが、後に特別賞の受賞へと繋がることになる。

#### アイデアに至るまで

私たちが注目したのは、進展を続けているインターネット技術である。この情報革新の動きを日本銀行の業務に応用すれば、何か新しいことができるのではないかと考えたのだ。インターネットを通じて、金融に関する情報やデータを効率的に集め、日本銀行の政策に活かすことができなにか、そんなところから考えはじめた。議論しているうちに、「電子掲示板『2ちゃんねる』と『日銀』を組み合わせれば、『日銀チャンネル』になる」という発想が出てきたところから、一気にアイデアが具体化していった。ネット上の電子掲示板を使って、参加者間で金融に関する質疑応答がで



きないか、また、金融政策について参加者間の討論も  
行えるのではないか、といった具合に話が発展し、辿  
り着いたアイデアが、今回の発表テーマである「金融  
特化型SNSサイト」日銀チャンネルの構築に向けて  
「」であった。つまり、日銀が「SNS」（ソーシャ  
ル・ネットワーキング・サービス）サイトを構築し、  
それを利用して、双方向で金融に関する情報の受送信  
を行ってはどうかという提案であった。

### 応募論文を書く

アイデアが決まったところで、役割分担をして応募  
論文を書き始めた。論文を書くことなど不慣れであつ  
たため、苦勞してやっと初稿ができ上がったのは八月  
上旬になっていた。さっそく中島先生に見てもらった  
が、私たちの自信に反して、指摘された項目は、予想  
を遥かに超えて多岐にわたり、また厳しいものであつ  
た。私たちの甘さも思い知らされた。真っ赤になつた  
原稿を前に、ひどく落胆したのを今でも覚えてい  
る。それでも気を取り直して、夏季休暇中も三人で集

まり、アイデアの練り直しと内容の修正を何十回とな  
く行つた。誰もいないキャンパスの暑さが印象に残つ  
ている。

### 決勝に向けた準備

日本銀行から決勝進出の連絡があつたのは、十一月  
二日、忘れもしない大学祭の前日である。決勝進出  
は、参加百四チームのうち、わずかに五チームのみ。  
その朗報を聞いた時には、本当に嬉しかった。しか  
し、喜んでばかりもいられない。プレゼン資料の締め  
切りは、三週間あまり先に迫っており、決勝に向けて  
の準備が始まつた。

決勝の課題は、制限時間内で論文の要点をまとめ、  
説得力を持ってプレゼンテーションを行うことにあ  
る。そのため、プレゼン資料は、文章での説明は最小  
限とし、可能な限りビジュアルなものとするよう心が  
けた。

決勝前の一週間は、本番を想定した実戦練習を毎日  
のように行つた。中島先生やゼミの先輩、学部の友人



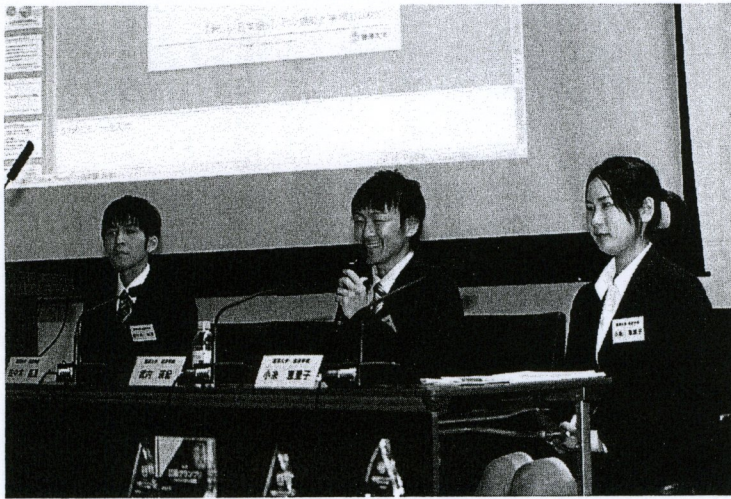
の前で発表を行い、審査員役で質問をしてもらったり、改善すべきポイントを指摘してもらったりした。答えられなかった質問については回答を準備し、万全を期して決勝に臨んだ。

### 緊張の決勝当日

日銀の支店長会議を開くという巨大な会議室での、日銀の副総裁や審議委員らの錚々たる審査員たちを前にした張り詰めた雰囲気は、これまでに経験したことのないようなもので、思わず心臓がバクバクした。プレゼンは、一番くじを引いた東京大学から始まり、私たち麗澤大学チームは四番目であった。私は他大学のプレゼン内容を理解しようとしたが、言葉はすべて頭の中を素通りしていった。

私たちの順番が回ってくると、不思議と緊張がほぐれていった。トップバッターの佐々木は全く緊張の色をみせず、朗々とした説明で出だしは好調であった。それに続く小糸も、練習通り堂々としたプレゼンであり、ポイントでは審査員の笑いも誘う出来栄であった。

た。これで一気に雰囲気や和み、私も自信をもつて、日銀チャンネルの内容について説明を行うことができた。難関となる審査員との質疑も、落ち着いて自分たちの考えを述べることができた。なんとかすべての質問に答えることができ、何人かの審査員は頷きながら聞いてくれた。



がら聞いてくれた。

結果は、敢闘賞が東京大学と東京経済大学の二チーム、優秀賞が明治大学と広島市立大学の二チームであり、最優秀賞に私たち、麗澤大学チームが選ばれた。電子掲示板機能、動画学習機能、体験型アプリケーション



ヨンなど、具体的な提言が多く盛り込まれていたことや、学内でアンケート調査を行い、それに基づいて現状分析を行った点などが高く評価されたようだ。さらに、日本銀行に対する優れた提言を行ったということで、特別賞も受賞した。予想もしない「ダブル受賞」であった。

### 日銀グランプリの経験から得たもの

今回、日銀グランプリへの挑戦を通して学んだことは主に三つある。第一に、挑戦することの意義であり、第二に、プレゼンテーション能力の重要性であり、第三に、チームワークの大切さである。

一つ目の挑戦の意義については、挑戦とはいわば、自分の限界を超えて「できないこと」を「できるようにする」ことである。挑戦し続ける人は成長し続ける人であり、今回の挑戦を通じて、自分たちの成長を実感することができた。

第二のプレゼン能力については、日頃よりゼミで徹底的に鍛えられているのだが、こうした訓練をまった

く受けていないと思われるチームもあり、自分たちの教育環境の良さを感じた。また、物事を分かりやすく説明するプレゼン能力は、社会に出ても役に立つ重要なスキルであることを、改めて痛感した。

最後にチームワークの大切さである。私たちは始めた当初から、「チームで勝つ」ということを念頭において行ってきた。人はそれぞれ、得意不得意があるため、互いに補完しあうことが大切である。私たちは、常に意思疎通を図りながら協力し合い、まさにチーム一丸となった勝利であった。

最後になるが、ご指導頂いた中島先生や、ご協力頂いた教職員の方々、ゼミの先輩や友人には心から感謝している。こうしたご指導・ご支援があつてこそ、今回、「日銀グランプリ」で最優秀賞・特別賞を受賞することができたものと思う。この場をお借りして、深く感謝したい。

この経験を大きな糧として、更なる向上を目指し、今後も、様々な挑戦をしていきたいと思っている。